



書院を鳴
らす

川崎ゆきお

「ワープロ専用機？ まだそんなものを使っているのですか。いや、それよりも使えるのですか」

「はい、まだ一度も故障したことはありません。それで動かなくなったとかも。エラーで固まることはありましたが、未だに使えます」

「不便でしょ」

「最新のパソコンは三年に一度は買い換えていますよ。当然そちらのほうが早いし多機能です。しかし、それがいけない。使わないような機能の方が多くてねえ。メニューを開いても、一生使わないようなものばかりだ。これはパソコンのワープロソフトに限ってのことですがね。パソコンなので、色々なアプリケーションが入っているでしょ。使わないものが並んでいたりします。特にメーカーものはねえ」

「パソコン向けの軽いエディターなら、機能はワープロよりも押さえられて、使いやすいのでは」

「私はプログラマーじゃないから、そんなのはいらないです。それにワープロ並みにメニューが多いですよ」

「じゃ、パソコンに最初から入っているメモ帳のようなものなら」

「あれは文化がない」

「あ、はい」

「ワープロ専用機には、雰囲気があった。例えば書院とか、文豪。これは雰囲気が出るじゃないですか。キーボードの一つ一つが書院であり、文豪なんですよ。書斎の一部です。専用機ですからねえ、それだけに特化している」

「まだ、そんなものが動いているので、驚きました」

「もう売られていませんよ。私の知る限りはね。しかしそれらはまだ電源が入るし、動く。私が最後に買ったのはフロッピーに落とせるタイプでしたから、これでパソコンでもテキストファイルとして読めますよ。流石にインターネットは無理だけど、パソコン通信はできます。また、赤外線で通信もね。まあ、それらはオマケのようなもので、使っていませんが。プリントもできますよ。これはワープロ専用機なので、当然ですよ。タイプライターのようなものなんだから」

「それで、お仕事を」

「そうです。実際に文章をタイプするのは、この古いワープロ専用機なのです」

「それは、ものを大事にするということですか、それとも愛着ができて、他のものじゃだめとか」

「いや、私が求めているのはタイプライターなんです。文字をキーボードで打てればいい。これは話し言葉、書き言葉の次にある打ち言葉なんです。打てば響く、反応がいいのです」

「打てば響く言葉って確かにありますねえ」

「楽器で言えば、打楽器だ。これは一番最初の楽器じゃないかと思えますよ。楽器じゃなくても、叩けば音が出る。木でもいいし、岩でも石でもいいんだ。そして、一番身近にあるのは手を叩くだ。手拍子、足拍子、これは道具がいらない」

「タイプライターや、キーボードはピアノやオルガンに近いですねえ。指を使うので」

「そうなんです。だから、ワープロ専用機じゃないと、いい音色がしない。書院のキーボード、文豪のキーボード、これは音が違うんです。私は書院派ですがね」

「文豪って、何ですか」

「ワープロ専用機の名前です。しかし名前負けします」

「はい」

「羨ましいです。そういう世界観があって」

「そんな大層な。しかし、今持っている書院が本当に壊れたら代わりがない。それで、出物を探している最中です。使わないで、何処かに眠ったままのがあるかもしれないのでね。できれば電源を入れっぱなしで、つまりコードを差したまま眠っていてくれる書院ならかなりの金額出します」

「はい」

「一番いいのはね、元箱に入ったままの書院です」

「それは」

「箱から出してもいいですよ。でも一度も電源を入れていない書院です」

「ありますかねえ」

「買ったまま忘れてしまい、元箱のまま仕舞い込んであるとか、引っ越しのとき、書院も持ち出したが、段ボールの中に入れてまま、まだ開けていないとかね」

「はあ」

「しかし、やはり、この使い込んだ私の書院が一番いい。私の指の皮でキーボードは磨かれてい

ます、かなり禿げた。しかし、指の乗り具合が擦れて摩耗し、丁度いい感じなんだ」

「いいですねえ、その感じ」

「これはねえ、洗濯板のようなキーボードを買ってきててもだめなんだ。最初からくつついてるタイプでね。その方が重心がいいし、響きもいい。音色が違う」

「はいはい」

「ここまで持っていくのに何十年もかかったよ。しかし、まだまだ浅い。ワープロ専用機なんてできたのは最近だ。味が出て来るのは、これからかもしれん」

「はい、大事にしてください」

「うむ」

了